資料　9

令和２年度 第１回医療連携推進会議　会議内容概要

と　き	令和２年９月１６日（水）午後２時～３時３０分
ところ	近江八幡市総合福祉センター　１階ホール
出席者	櫃本委員・水原委員・富永委員・磯矢委員・辻井委員・田村委員・角野委員、宮下委員 小林委員　滋賀県医療福祉推進課　中村愛子氏　計１０名
欠席者	森村委員
傍聴者	なし
事務局	長寿福祉課
議事 事項	・本市の在宅医療・介護連携推進事業の方向性および目指す姿について
内　容	○開会あいさつ（眞野課長） ○配布資料確認（事務局）、会長選出（櫃本会長）副会長選出（水原副会長） ○議事事項 医療連携推進会議の位置づけおよび本市の在宅医療・介護連携推進事業の方向性および目指す姿について ＊事務局説明 ・医療連携推進会議の位置づけやこれまでの取り組みを報告、在宅医療・介護連携推進事業の方向性について提案。「市民が必要なときに適切な医療や介護等を活用し、望む支援を受けながらなじみの関係性の中で生活を継続できることで自分らしい生き方、死に方が実現できるよう関係機関の協働のもと高齢者や地域（関係機関含む）が持っている力を引き出しながらしくみづくりを推進する。」 ＊事業の方向性や、目指す姿について意見を求め合意を得た。 ＊主な意見等 ・本人がどのような生活を望むのか明確にし、なじみの関係性の中で医療・介護等の関係機関の支援を受けながら自分らしい生き方をする。その延長に自分らしい死に方がある。そのために高齢者のセルフケア力を高めていくことが必要。 ・訪問介護や訪問看護に対する過剰な期待があり、高齢者自らが自立意識を持つことは重要であり、時間をかけて意識付けをしていくことが必要。長年、訪問診療をしていると、近隣には誰が住んでいるか分かるので、「独居で 99 歳の人がいて…」と言うと、隣近所の助けが入ったケースもある。自助と共助をつなぎ合わせることは重要であり、地域に根差していくような活動ができたらと思う。 ・主たる生活の場は家、病院は仮住まいと言っても理解が得にくい。高齢者の本心としては、できるだけ家で日常生活を過ごしたい思いがある。残された人生を自分らしい生き方ができるように早く退院できるように取り組みをしている。

	・高齢者がしたいようにやりたいように生きることを、一緒に支え手伝う。訪問看護のみで支えるには、限界があるが、地域の若い力を引き出せれば、高齢者の望む暮らしを叶えられるかもしれない。 ・地域の自助と共助について、高齢者が自らこのような生活がしたいという気持ちを引き出すことが重要。持っている力を引き出すことを念頭にしないと、結果的にあきらめ、遠慮になってしまう。関係機関が連携することで（高齢者や地域の）思わぬ力を引き出せることもある。 ・本事業の方向性を関係機関や地域が共有していたら直接会わなくても、「〇〇やっていただけませんか」「この人を釣りに連れて行ってあげませんか」などの要望に対する協力体制が自然とできる。 ・ケアマネジャーは、高齢者が望む生活ができるよう支援チームを作る役割が求められているが、困難事例の対応でそこまでの役割が果たせてない現状がある。 ・認知症になり徘徊しても安心できるためには、住民が地域づくりの重要性を認識する必要がある。地域の雰囲気を作っていくことにチャレンジしないといけない。専門家や行政だけが連携しても高齢者の依存を促進するだけであり、結果として突き放してしまうことになる。 ・本事業の取組は、行政リード型では上手くいかない。課題には振り回されながらも、いつもどこかで、ねらいや目指す方向性は何かと振り返ることが重要。縦割りで課題解決的に事業が行われているが、現在していることを整理し、既存の資源を生かしながら、再度、目指す方向性に取組を乗せ直す作業がこの部会でできるのではないか。 ・つながりネットの医師の参加が少ないので、今後、広がりをもたせることが必要。 ・市民の雰囲気を変える上で大事なことは、専門家の意識である。時間はかかるが、患者は何のために医療や介護を使うのか考える必要がある。ACP の普及やかかりつけ医を持つこともひとつの目標。近江八幡市の市民として、この地域で自分らしい生き方をやっていきましょうという雰囲気に地域全体がなるとよい。 〇閉会あいさつ ・ 在宅医療介護連携については、長年この議論を続けてきているが遅々とした歩みであり、皆が真剣に考えて手を加えていくしかない。今回は理念的な話が中心だったが、最前線のスタッフと思いを共有することが大事である。